

會員 大木 則雄 記

ル所ナキニ非サル可シ然リテ而シテ此含室体ニシテ此「アトマイン」ヲ生シ彼含室体ニシテ彼ノ「アトマイン」ヲ産スル等必ス其變化ノ一定最現ノ變セサル時ハ固ヨリ論ヲ埃サルナリ

以上考察スル所ニ由リ余ハ脚氣毒ヲシテ假リニ米飯ト魚肉他ノ一定ノ含トニ其罪ヲ掩ハシメ付スルニ左ノ語ヲ以テス

脚氣病ハ三浦教授ノ檢考スルカ如ク中毒症ノ一ナリ而シテ其毒ハ人腸中唯々特異ノ要約アル時ノミ發起スル異常醱酵ノ生産物ナリ本毒ハ輒近畿菌學ノ進歩ニ由リ推究スルニ化學的物質ナルハ疑フ可カラス而シテ其醱酵素ハ恐クハ有形ニシテ「アネロヒオセ」ノ關係ニ因テ構成スルモノ、如シツ諸氏ノ試驗(一千八百九十年十一月獨乙醫事(後半未完)週報號外)

◎破傷風患者ノ一實驗

左ニ報道スル破傷風ノ一患者ハ過ル明治廿四年十月五日在金石止見伊三郡氏ノ添書ヲ持シテ我金澤病院內科部ニ來リ診ヲ乞ヒ直チニ入院加療ヲ受ケシ所ノモノニシテ該症ノ稀有ナルハ當地方ノミナラス本邦ニモ稍ヤ稍レナルハ諸君ノ既ニ知ラル、處ナリ」不肖余カ病院ニ奉職シテ以來四年間該症ヲ見聞スルハ本患者ヲ合シテ只貳人ニ過ギズ由テ不文ヲ顧ミズ聊カ記シテ諸君ノ高覽ニ供セントス

本患者ハ我カ內科長黒柳教授ノ指導ニ由リ實驗加療シ得タルモノニシテ今茲ニ是カ記事ヲナスニ當リ深ク同師ニ謝シ併セテ送致セラレタル在金石正見氏ニ謝ス

上金石下新町住漁業

加 藤 某

三十四才

(既往症)母ハ消渴症後膀胱症(?)ニ由テ死シ父及兄妹
四人皆健存血族中遺傳病ノ記スヘキナシ

生來強壯ニシテ漁業ニ從事シ曾テ病苦ノ何タルヲ知ラ
ス感冒一日ノ褥ヲ取リシヲナシ

「本病來歴」本年九月二十四日自宅ノ庭前ニ於テ跣歩ノ
際誤テ古釘^{セル}屋根ノ風返シノ破壊ニ由テ右足蹠趾球ノ

内上側ニ刺傷ヲ受ケ釘ノ刺入スルヲ一分計リナリシカ

直ニ拔去シ石炭油ヲ以テ洗ヒ古木綿屑ヲ以テ綑帶シ放
置セシカ二日計リ輕キ疼痛アリテ後治セリ然ルニ十月

三日ニ至リ營漁ノ際輕ク腹痛ヲ來シ翌四日ヨリ食ヲ取

ラントスルキハ少シク牙關ノ緊攣スル感アリテ漸次増
劇シ五日ニ至リテハ既ニ食塊ヲ咀嚼シ得サルニ至リ來

院診ヲ乞フ

(現在症)〔明治二十四年十月五日午後記〕

体格偉大營養佳良ノ一男子身体諸筋肉及皮下脂肪善ク

發育シ体表黝黑色ヲ呈シ前額ノ左上方頭髮ニ接近セル
部ニ半胡桃大ノ瘤狀ニ隆起セル腫瘍ヲ見ルノミ胸腹内
臟異變ナク足蹠受傷黒點(?)ヲ認ムムルノミ判明ナラ
ス壓スルモ疼痛ナシ

患者ノ主トノ訴フル所ハ開口セントスルニ當リ牙關ノ
緊攣シ上下齒列ノ稍ヤ緊切スルノミ

臭剝四、〇苦精二、〇蒸水一〇〇、〇 一日四回分服
劑ヲ投ス

(經過及療法)

十月六日 齒牙緊攣ニ兼テ頂部ノ攣急、胸筋及背筋ノ

痙攣ヲ來シ稍ヤ反張スルノ傾向アリ試ミニ開口ヲ命

スルモ容易ニ能ハス辛フシテ少シク上下齒列間ヲ開

クノミ

臭曹(六、〇)葦菰越幾斯、苦精劑 甘汞蒺刺巴下劑

含水クロラール(三、〇)ゴム漿劑臨時二分ノ一服用

十月七日 痙攣ハ發作性トナリ疼痛甚シク主トノ頂部

ヨリノ背筋ニ來リ角弓反張ス兩下肢ニモ痙攣アリ

臭曹劑增量持長 便通充分ナラス石鹼浣腸ヲ施ス

合格内服劑服用シ得ス由テ左方浣腸劑トス使用ス

合格(四、〇)ゴム漿(三〇、〇)蒸水(一〇、〇)臨時半

量浣腸

十月八日 昨日午後五時頃ヨリ痙攣發作頻回合格浣腸

劑充分ノ奏功ナシ由テ「コロ、ホルム」吸入法ヲ試ミ

シニ一時諸症大ニ緩解セシモ暫時ニノ再發數回苦悶

ノ狀甚シキヲ以テニ更夜中三回吸入セシメシモ著シ

キ奏功ナシ依テ午後十一時三十分莫非(〇、〇一)皮

下注入ヲ試ミシニ本朝ニ迄就眠シ得タリ

体中諸筋ノ痙攣發作頻回苦痛ノ狀態名狀シ難シ殊ニ

四肢ノ痙攣著シク就中右上肢ニ甚タシ

具曹劑持長

合格浣腸劑

強列發作ニハ姑息の

コロ、ホルム吸入ヲ用エル數回

患者莫非皮下注入ニ由テ最多數時間輕快ヲ得

赤酒(二五、〇)單舍剎臨時四分ノ一服用

十月九日 絶ヘス痙攣、疼痛ヲ訴ヘ呼吸筋ニ來ス際ノ

如キ恰モ窒息セントシ甚シク苦悶アリ」麻醉劑ニ由

テ就眠スルノ間姑息の安ナルヲ得ルノミ全食量牛乳

一合

臭曹劑増(量一二、〇)持長 他前方

十月十日 同前日 全食量牛乳一合

十月十一日 同前日 全食牛乳三合計

十月十二日 同前日 熱候三八、五度

諸方 赤酒(四〇、〇)劑一日五回分服トス

十月十三日 痙攣特ニ劇シク不斷來シ熱候去ラス

麻醉劑奏功ナシ 全食量牛乳一合計

十月十四日 半ハ昏睡狀ニシテ稍ヤ麻醉劑ノ効力ヲ失

スルキハ強直性痙攣ヲ發シ苦痛ノ狀アリ脈質細數ニ

シテ弱シ熱三九、六

前諸方持長

十月十五日 前日ニ同シキモ衰弱甚シク午後熱候昇騰

三九、八度ニ至リ夜ニ至リ心臓麻痺ニ由テ薨ル